12 − 1

# 「チベットにおける宗教と国家」

発表者　佐藤長　（'66 I 17）

出席者　佐藤、梅棹、藤岡、上山、川喜田、谷、
飯沼、桑原、米山、和崎、中尾、石井、
上田、石毛。

## I. 農業

Nk. ソンツエンカンポのころ遊牧か？　チベットの生業は、農耕と放牧が一家で相互無関係に行なわれている。その比は自由自在で、0%〜100%までにおよぶ。

Kj. 最初は狩猟が生業。つぎに西アジアで発生した最初期の農耕がチベットに入った。その段階は、
1. hunting
2. 家畜、大麦、小麦、hunting
3. mixture

Nk. hunting は想像できるが史料なし。
チベットはウクライナおよびその南部より古代麦作が入ったところだ。チベット農業は高度だ。品種が進んでいる。

Um. 四川、西康、イラワジ上流がチベット人の祖先の在地である。チベットとビルマの関係を考えねばならぬ。

Nk. 西アジアより東西へ入ってきた穀物には、チベット経路がある。
チベットより、中国へ技術、品種をやっている一方、中国より受けとったものが大変すくない。

St. チベットを遊牧民的とするか、農耕民的とするか？

Um. 牧的要素は、あとからではないか。

Kj. はじめから、agro-pastoral ではないか。

## II. ヤク ― 輸送革命 ―

Um. 朝貢貿易のキャラバンに使用された家畜はなにか？

Nk. ダライラマの中国のキャラバンはヤクでなされた。

Um. チベットはロバの原産地だ。

Nk, Um. ヤクには品種が沢山ある。そこでヤクの家畜化は古い時代に行なわれたものであろう。

Kj. 週辺の牛を飼う文明より、シゲキされ、ヤクの家畜化が

おこった。ヤクの使用がはじまると、人力輸送の10倍以上の効率があがる。

## III. 仏教の受け入れ

Kj. 6～7世紀の輸送革命にともないtribalな社会が解体していく。その過程で仏教を受け入れる用意がなされる。
古きよき時代――traibal democracyへの志向が仏教の受け入れと関係がありそうだ。国内に貧富の差が出たこと。仏教導入に関係はないか。

St. 伝承によれば、貧富の差がそのころ生じたということは言える。

Kj. 王が共産化をはかっては失敗した例が3度ある。この分配のdemocracyのかわりに入ったのがラマ教だ。俗界における階級隔差をラマ教が安全弁としておさえる役割をした。

## IV. 土着宗教との習合

Nk. 仏教としてのラマ教をチベットの軸としてとらえては、危険だ。土着宗教も考えねばならぬ。

Kj. チベットは宗教のふきだまりだったところだ。仏教を高等宗教としたとき、他の在来宗教のurbanizationとして仏教をとらえたらよい。仏教は都市的宗教である。

St. 中央アジアのマニ教、ネストリウス教の影響がチベットのラマ教にはある。

Kj. チベットに入った仏教が一度排撃されたのち、ボン教がもちこまれたことがある。このボン教は、semi-organizedされた西チベットのボン教である。

## V. 僧院

Yn. 寺院は地理的にはどのような場所に位置し、土地、財産をどの程度持ったか？

St. 寺院は、万戸の中心にある。万戸は、その地方の豪族の所在地である。寺院は城塞的で、私兵を持ち、俗的諸侯と同じく土地所有主である。ラマ教寺院には、ゴロツキみたいな者も多い。寺院は人口調節の役もはたしている。頭のいい子はお寺にやる。才能のある者の出世できる場所は、

—

僧院である。

St. チベット寺院は、商業活動機関でもある。

K チベットではボウズが金銭的なことも堂々として要求する。

St. 古い文献でも、「黄金を献上されて高僧喜びたまえり」と書かれている。

Kj. 高僧がいるかいないかで、寺の繁栄が大いにちがう。徳の高さとは、直観的洞察力にある。会ったら、何か伝わってくる力を持った者がえらい。

## Ⅵ. 聖と俗

Kj. チベットの政治、宗教体係は聖俗２分法である。これは世界各地にみられるが、起源はシャーマニズムではないか？

Um. チベット、ラマ教国は、聖俗分離していないところとは考えられぬか？

Kj. 聖俗のいずれかが、時代によって前面に出る。しかし、常に聖、俗双方が存在する。

Um. 土地権力とラマ法王との関係は？

St. 内閣は４人であるが、２名が俗人だ。ゾンペンという俗人が聖的権力とは無関係に、地方の税金とりたてに従う。地方統治は俗人のゾンペンによってなされる。

Nk., Kj. ゾンペンが実際に人々を治める一方、僧侶がその看視役をつとめる。

Kj. ダライラマは、聖俗両権のバランスの上にのっている。

In. なぜ俗的諸侯のあらそいに、ラマが介入したか？
ヨーロッパでは、法王がいても、俗的諸侯はテッテイ的にあらそった。チベットの宗教的特色が諸侯のあらそいをテッテイさせなかったのだろうか？

## Ⅶ. 宗教と近代化

Um. 清朝の中国統治が進むにつれて、清はラマ教とはなれた。

St. イギリスと親しかったのに、なぜチベット人は近代化への努力をしなかったのか？ チベット人は近代化への理解力を持ってなかった民族か？ 小学校ひとつたてることをしなかった。

Kj. 地理的ハンディキャップのうえに、戦闘力が僧院に吸収されてしまっていた。僧院がなかったら、富国強兵ができただろう。

—

St. 独立国だったら富国強兵をするが、宗主国だったという事情もある。

Nk. 法王だったから、近代化へ目を向けなかった。俗的王权だったらちがうだろう。王权はどんな程度の悪いのでも、ボウズよりはましだ。

Um. チベット文化とビルマ文化の比較研究——両者とも、仏教のうけ入れかたが似ている。僧院組織 仏教国・近代化アカン、属領になる。

Nk. 仏典のホンヤクはチベットのなした大きな仕事である。

St. ホンヤクは8世紀なかばから。12世紀ごろにはできている。

Isii 仏典をホンヤクして使用しようとすることには、インド・ヨーロッパ的ロジックへせまろうという過程がみられる。

Hz. カラコラムのロールシャッハでは、小学校低学年あたり。プレ・ロジックで直観力にウエイトをおく。合理性に対するロジックが出てこない環境で形成されたパーソナリティでは、近代化が出来ない。

ホンヤクしたもの ——
ホンヤクしないもの ——

## VIII. 中国との関係——ダンカとボウズ——

Nk. チベットにはチベット以外の土地に住む部族が多い。これをチベットと考えてよいか。

St. ダライ王国以後、チベット国家がはっきりし、チベットに帰属する民族は明確にされている。

Ue. 厂史的に考えて現在の中国のチベット併合は、合法的か、侵略か。

St. 18世紀、ダライ王朝ができたとき、中国は宗主国となったので、このとき以来チベットは中国の主权下になったといえる。辛亥革命中、チベットは独立宣言をした。しかし中国はこれをみとめなかった。

Kj. チベットの側に立ったら、国家の考え方が中国とはちがう。俗权はダンカだ。モウコとか清朝はダンカである。中国側は宗主权をたてにとる。両方とも勝手なように考えている。

St. 清朝に、駐蔵大臣がおかれ、チベットの国内政治もこの大臣の承認を必要とした。また清朝に外交权をまかしてしまった。

Kj. チベットに理解を持ったのは満州族である。満州族は、聖俗二分を理解した。ところが中国側が態度をかえたのだ。

St. 康熙帝までは、ダンカ、ボウズ関係であったとしてよい。

Um. 清初期には、満州——モンゴル——チベットがラマ教を共通として、連合関係をバっていた。